みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Anthropology and Anthropological Education in France

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003972

国立民族学博物館研究報告31(1): 57-85 (2006)

フランスの人類学と人類学教育

竹　沢　尚一郎*

Anthropology and Anthropological Education in France

Shoichiro Takezawa

The aim of this paper is to give an overview of French anthropological research and education system. The paper has three focal points: to trace a history of French anthropology from 1900 to 1960; to specify the characteristics of French anthropological institutions; and to discuss the problems and possibilities of current French anthropology.

1. The development of French anthropology before World War II was realized through the Ethnological Institute of the University of Paris, founded in 1925 by M. Mauss. It trained a number of anthropologists, including Lévi-Strauss, Leiris, Métraux, and Dumont. After World War II, these scholars were divided into several schools of French anthropology; the Ethnological School of Griaule; the structural school of anthropology of Lévi-Strauss, who became professor at the Collège de France; and the social and political anthropology of Balandier, who was professor at the University of Paris and founded the African Research Center (CEA) in 1959.

2. After World War II, France, began to create some centers of research such as the CEA, and those at the Sorbonne and the Collège de France. Since 1975, EHESS, a new institute for social sciences, has offered possibilities for graduate students to acquire advanced knowledge in all branches of social sciences. With about fifty anthropologists, it provides a solid educational base to students coming from around France and abroad. Each year, it receives over a hundred doctoral students and approves about fifty Ph. D. theses. It operates also as a national center for anthropology in France, which has no national society of anthropologists.

3. French anthropology has been divided, since 1960, between the structural anthropology of Lévi-Strauss and the social anthropology of Baland-

* 国立民族学博物館民族文化研究部

Key Words：French Anthropology, Anthropological Education, Lévi-Strauss, Balandier
キーワード：フランス人類学，人類学教育，レヴィ＝ストロース，バランディエ

ier. The former has tried to refine methods of analysis, but neglects social and cultural problems. The latter has been oriented to political and historical problems, but its analytical tools remain less sophisticated. Some scholars such as Godelier and Augé have tried to put together these currents in vain, and have no followers among the younger generation of anthropologists. French anthropology seems to be divided into many small compartments between which communication is barred. As long as this compartmentalization remains, France will not be able to breathe new life into world anthropology.

序文
1　フランスにおける人類学の歴史
2　フランスの高等教育システム
3　フランスの大学院における人類学教育の特徴
4　フランス人類学の現状と展望

序　文

ここではフランスの人類学の現状を紹介していきたい。それにあたって，私が焦点化するのは 2 つある。1 つは，歴史を反照しつつフランス人類学が抱える課題を浮き彫りにすることであり，もう 1 つは，フランス人類学の今後を占う意味でも，大学院の人類学教育に焦点を当てることである。

個人的なことを述べれば，私は 1979 年にパリにある社会科学高等研究院の博士課程に留学し，1985 年に博士論文を提出した[1)]。したがって私がここで論じるのは，パリにおける人類学の現状であり，そこでの大学院教育にかぎられている。もっとも，フランス社会はどの側面においても中央集権的傾向が強く，とりわけ学界においてはその傾向が一段と強い。それゆえ，主要な大学が各地に点在して存在するアメリカ合衆国などとは異なり，パリの状況について論じることはほぼそのままフランスの学界全体について論じることにつながっている。

本稿は 4 部からなっている。最初に，フランスにおける人類学の歴史を簡単に振り返る。この部分は本稿の主テーマからは離れるので，関心のない方は飛ばしていただいて結構である。つぎに，フランスの大学院教育のシステムとその特徴について説明する。フランスはグラン・ゼコールと呼ばれる独自の高等教育の制度をもっており，これを押さえておかなくてはフランスの高等教育を理解することは困難なためであ

る。第 3 に，フランスの人類学教育の特徴について，社会科学高等研究院のそれに重点を置きながら触れていく。社会科学高等研究院は，フランスで人類学を教える教育研究機関としては質量ともに最高レベルにあり，それによってフランスの実情を代表させることができると思うためである。最後に，フランスの人類学界の現状と課題について，私のかぎられた観点からではあるが，意見を述べる。

1　フランスにおける人類学の歴史

フランスの人類学の歴史において，主要な契機を図表化したのが表 1 である。これに沿って，人類学の制度化の過程について説明しよう[2)]。

自然科学が急速に発展し，社会のあり方を大きく変えていた 19 世紀のフランスにおいて，人類学の制度化はまず形質人類学の発展というかたちで実現した。それに大きく与ったのは，優れた外科医であり解剖学者であったポール・ブロカ（Paul Broca）である。大脳の右脳左脳の機能分化の発見者として名高いかれは，今日までその名が残る言語中枢の発見者としても知られるなど，その功績はまず解剖学者としてのそれであった。何千という大脳を解剖し，その重量や容積を計測したかれは，やがて人種間の知的能力の差異に関心をもつようになり，形質人類学を中心に，生物学，医学解剖学，言語学，民族学，統計学などを総合する一科学としての人類学を構想するようになった。かれを中心として 1858–59 年に設立されたのが「パリ人類学協会」（la

表 1　フランスにおける人類学の歴史

1855	自然史博物館に人類学（形質人類学）講座設置，トピナール教授就任
1859	ブロカを中心に，パリ人類学協会を設立
1876	ブロカ，人類学学校を設立する（形質人類学，民族学，統計学などの講義）
1878	トロカデロ民族誌博物館開設　ブロカ派のアミーが主任学芸員になる
1902	マルセル・モース　高等実践研究院の「非文明社会の宗教学」講師に就任
1925	モース，レヴィ＝ブリュル，リヴェにより，パリ大学付属民族学研究所設置
1933	マルセル・グリオールによるダカール・ジブチ探検隊出発
1938	トロカデロ民族誌博物館を人類博物館に改組　初代館長にリヴェ
1942	マルセル・グリオール，ソルボンヌの初代民族学講座教授
1959	レヴィ＝ストロース，コレージュ・ド・フランス「社会人類学」講座教授
1960	『人類』誌（*L'Homme*）『アフリカ研究誌』（*Cahiers d'études africaines*）創刊
1975	社会科学高等研究院設立，人類学スタッフ 40 人以上を擁する
1982	レヴィ＝ストロース退任　F. エリチエ　コレージュ・ド・フランス教授
1990	マルク・オジェ，社会科学高等研究院長就任（～ 2000 年）
2002	人類博物館解体　民族学部門はケ・ブランリー美術館へと組織替え

Société d'anthropologie de Paris）であり，それを模倣してロンドンやベルリンでも「人類学協会」が設立されるほど[3]，その名声はヨーロッパ中に鳴り響いたのである。

協会の名声と人気が高まったのを見たブロカは，その知識を一般市民にも還元していくべく，1876 年に「パリ人類学学校」（l'Ecole d'anthropologie de Paris）を設立する。これはパリ市やパリ大学医学部，ロスチャイルド家などからの資金援助によって設立されたものであり，自由聴講の，卒業証書も出さない私立の学校であった。しかし，そこでの講義の斬新さはパリのスノッブたちの一種の流行となり，多くの聴講者を集めることに成功した。大学といえば資格に結びつく法学部と医学部が中心で，文学・理学あわせても大学生数数百という時代に，この学校は毎年万を超える登録聴講生を集めたのである（竹沢 2001: 79）。

この人類学学校の成功は，パリ市民が新しい知識に飢えていたことに求められるが，それに加えて，人種間の差異を論じ，ヨーロッパ人種の優越を科学的に「実証」しようとしたその教説が，植民地支配の拡大という時代背景のなかで，多くの人びとにアピールした点にあったといえよう。産業革命のもとで西欧諸国と他地域との交易が急速に進展し，列強が植民地の争奪に邁進し出したこの時代，植民地の拡張と支配を成功させるためには国民挙げての同意が必要であった。そのプロパガンダのためにおこなわれたのが万国博覧会であり，そこでは産業の発展がもたらす人類の「未来」が展示されると同時に，人類の「過去」としての「未開民族」の慣習や物質文化が展示された。その意味で，初期人類学は疑いなく植民地拡張の「娘」として産声をあげたのであり，その目的は，世界各地の諸民族に関する知識を整序し，「未開」から文明にいたる進化論的序列にしたがって配置することにあったのである（竹沢 2001; 2005）。

やがて 1878 年には，パリ万博の施設の跡地利用として，「トロカデロ民族誌博物館」（Le Musée d'Ethnographie du Trocadéro）が設立され，ブロカ派の一員であるエルネスト・アミー（Ernest Hamy）が主任学芸員として採用された。アミーもまた形質人類学を専門とし，その理論的背景は進化論にあった。かくしてブロカ派は，自然史博物館と民族誌博物館をはじめ，学会組織，学会誌，専門の学校というように，すべての研究・教育施設を独占していったわけである。こうしたことは他のヨーロッパ諸国にも見られた傾向であり，植民地拡張が時代の趨勢であったこの時代，各国は競って民族学博物館[4]や学会組織を作ったが，そのほとんどは進化論の立場に立つ形質人類学者が支配的な地位を占めていたのである。

こうした形質人類学の優位に対し，社会人類学や文化人類学が誕生したのはずっと

後であった。ところで，人類学の歴史にとって 1871 年は重要な年である。この年，アメリカ合衆国ではモーガンが『人類の血縁と姻族の諸体系』を出版し，イギリスではタイラーが『原始文化』を出版した。その後の社会人類学の主題のひとつである親族研究と，文化人類学の主題である宗教や儀礼の研究の開始を告げる本が，この年にあいついで出版されたのである。とはいっても，それに引き続いて順調に社会人類学および文化人類学が発展したわけではなかった。そこには，研究方法と研究対象の明確化という，科学の成立にとって不可欠の要素が欠如していたためである。すなわち，社会・文化人類学に固有の対象がなんであるかがいまだ明確にされていなかったし，この学の固有の方法としてのフィールドワークと参与観察もまた充分には開発されていなかったのである。

たとえばタイラーの『原始文化』は，人類学の曙を告げる書として高く評価され，その文化の定義は今日になってもしばしば引用されている。

> 「広義の民族誌的意味からすれば，文化ないし文明とは，知識，信仰，芸術，道徳，法，慣習その他の，社会の一員としての人間が獲得した能力と習慣を包摂するあの複雑な総体である」（Tylor 1929–1: 1）。

しかしながら，この定義には今日の文化の定義とは大きく異なる点がある。第一に，タイラーは文化をつねに単数で使っており（Stocking Jr. 1968: 203），このことは文化相対主義的な視点の欠如という以上の大きな問題を示していた。つまり，タイラーにとって「文化」はひとつしか存在しないものであり，世界各地で観察される文化の差異は，人間にとって唯一の「文化」の発展段階の違いとして位置づけられていたということである。ここには 19 世紀の時代精神としての進化論的見方が支配的であったのは疑いないが，それだけでなく，むしろより大きな問題は対象の切り取り方にあった。タイラーにおいては，個別の民族や社会を研究対象として取り上げるという視点はなかったのであり，したがってその議論は，アニミズムや呪術，宗教発展論といったその後の宗教人類学の主要テーマをとりあげてはいたが，人類一般を対象とする一般論に終始した。そして，こうした一般論を転換して，個別の社会および文化に着目するようになるには，エミール・デュルケーム（Emile Durkheim）の社会学の成立が必要だったのである。

別のところで詳述したのでくりかえさないが，13 歳のときに普仏戦争の敗戦と，かれの故郷の隣県であったアルザスの割譲を眼のあたりにしたデュルケームの社会学の特徴は，徹底してナショナリスティックな社会の理解にあった（竹沢近刊）。かれは 1893 年の『社会分業論』，1895 年の『社会学的方法の規準』，1897 年の『自殺論』

と，1890 年代にあいついで主要著作を出版した。そこでかれがめざしたのは，コントやサン＝シモンなどの過去の社会思想家がおこなったような人間社会についての抽象的な議論をすることではなく，個別のフランス社会をとりあげ，それを構成する諸原理を発見することであった。それによってかれは，分裂のなかにあったフランス社会に有機的な連帯を再建しようとしたのである。

デュルケームとドイツのテンニースは社会学の祖としてしばしば並んで論じられるが，社会の一般的な類型論に終始したテンニースと，デュルケームとの違いは明確である。その違いを要約するなら，両者ともに一般学・総合学としての哲学の強い影響下にあったが，社会学を志した哲学者のテンニースに対し，哲学的要素を引きずった社会学者のデュルケームといってよいかもしれない。デュルケームによって確立された社会学は，これ以降，明確に境界づけられた一社会を対象として，それを構成させている内的要因の理解へと突き進むことになる。人類学の分野では，のちにマリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンが機能主義的発想[5]とともに新しい研究方法を開拓するが，それが可能になるためには，民族と呼ぶのであれ社会と呼ぶのであれ，研究対象の限定と明確化がまず必要であった。それをおこなったものこそ，デュルケーム社会学の功績だったのである。

新しい社会学をつくりあげたデュルケームは，それをフランス社会に確立するべく，1898 年に『社会学年報』（*L'Année sociologique*）を創刊し，甥のモースをその宗教社会学部門の責任者に据え，それと平行してかれを高等実践研究院の講師に推薦する。緻密な方法論に基づく研究を遂行すると同時に，デュルケームやモースがリクルートした若い研究者を結集したかれの社会学の研究集団は，「社会学年報派」と呼ばれてフランス社会と学界に新風を巻き起こした。人類学の分野に限っていえば，1880 年のブロカの急死以降，ブロカ派の活動が停滞していたこともあり，「未開」社会とその慣習体系に関する研究は社会学年報派の独壇場となっていった。1899 年には，ブロカの後継者が，「生物学が社会現象を直接に説明できると信じることに対して警戒する」よう警告している。それは人間社会とその慣習の研究においては，デュルケーム社会学の方がはるかに有効であることを認める発言であった（竹沢 2001: 165）。

方法論においてデュルケームの貢献は決定的であったが，フランスにおける人類学の発展という点では，直接に貢献したのは誰よりもマルセル・モース（Marcel Mauss）であった。1902 年に高等実践研究院の「非文明社会の宗教学」講座の講師となったかれは，ここを拠点に活動を拡大していく（この講座は，1936 年からは『ド・

カモ』で名高いモーリス・レナール（Maurice Leenhardt）が，そして 1950 年からはクロード・レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）が就任することになる由緒ある講座である）。ヨーロッパ古代宗教を専門としていたアンリ・ユベール（Henri Hubert）と共著で書いた「供犠論」（1898 年），「呪術論」（1902 年）の他に，第一次世界大戦終了後のモースは，人類学史に残る「贈与論」（1925 年），「身体技法」（1936 年），「人格の概念」（1938 年）など，それまでにない新たな問題構成を作り出すことで，世界の人類学界を一変させていく。しかし，謹厳実直を絵に描いたようなデュルケームと異なり，「人生に豪奢さを与えるものすべてに貪欲であった」（Fournier 1996: 585）モースは，その才能を著書に閉じ込めるにはあまりに自由で奔放であった[6]。

フランス人類学のためにモースの果たした功績は，むしろ 1925 年に，「未開心性」の研究で名高いレヴィ＝ブリュル（Lévy-Bruhl）らとともに「民族学研究所」（Institut d'ethnologie）を設置した点にあっただろう。それまでモースが勤務していた高等実践研究院（Ecole Pratique des Hautes Etudes）は，大学修了者を対象とした研究機関であり，そこに来る学生の数は限られていた。これに対し，この研究所はトロカデロの民族誌博物館に置かれていたが，パリ大学付属機関として設置され，学部生から大学院生までがその講義やゼミナールに参加した。博覧強記で，つねに思いがけない仕方でデータを組み合わせるモースの人気もあり，それに出席する学生の数は増える一方であった[7]（1930 年代には毎年 100 人以上が登録していた）。ここからは，レヴィ＝ストロース，レナール，ルロワ・グーラン（André Leroi-Gourhan），オードリクール（Haudricourt），マルセル・グリオール（Marcel Griaule），ミシェル・レリス（Michel Leiris），ドゥニーズ・ポーム（Denise Paulme），ルイ・デュモン（Louis Dumont）など，つぎの時代のフランス人類学界を指導する研究者がぞくぞくと誕生していったのである。

もっとも，モース自身はみずからフィールドワークをおこなうことはなく，アームチェアーの人類学者にとどまった。しかし，かれおよびデュルケームの影響は海峡を越え，イギリス人類学のあり方を大きく左右した。機能主義人類学を提唱し，世界の人類学会を変革させることになるマリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンの 2 冊の本が出版されたのは 1922 年のことであるが，そこにはデュルケーム社会学の影響を明らかに見てとることができる。実際，マリノフスキーはフランス社会学の研究を読むことを学生に勧めていたし（Goody 1995: 33）[8]，ラドクリフ＝ブラウンはみずから「フランス社会学者」と名乗り，南アフリカ，オーストラリア，シカゴと渡り歩いたかれのキャリアにおいて，『社会学年報』を手放すことがなかったという（Fournier 1994:

635）。また，かれのオックスフォード大教授選考に際しては，モースは推薦状を書くなど，フランスとイギリスのあいだの交流は私たちが想像する以上に密だったのである。

フランスにおいてフィールドワークにもとづいた人類学が誕生するのは，モースの弟子のマルセル・グリオールが 1933 年に組織した「ダカール・ジブチ探検隊」（Mission Dakar-Djibouti）によってである。アフリカ大陸を西から東へと横断するかたちで実施されたこの探検行は，1938 年に新装なる「人類博物館」（Musée de l' Homme）の展示のための収集を目的とするものであったが，これはフランスに現地調査に基づく人類学の誕生を告げることにもなった。この探検行の途中で西アフリカのドゴン社会に出会ったグリオールらは，ここを集約的な調査の対象と定め，多くの人員と長期にわたる労力を投下した。そこからは『水の神』に代表される数十冊の書物と百以上の論文が出版されたが，それによってはじめてアフリカの宗教体系の複雑さと洗練さとが西欧に向けて発信されたのである（グリオール 1982; 竹沢 2001: 257–270）。

やがてグリオールはソルボンヌに最初の民族学講座を開設し，その初代教授となる。しかしかれが指導した学派は，明確な方法論を打ち立てるにはいたらなかったこと，アフリカの宗教体系の解明に沈潜するあまり，社会システムや経済活動についての研究をなおざりにしたこと，植民地状況やイスラム化の進展といった同時代社会の動きに背を向けていたこと，などの理由で閉塞していった。数名の熱心な支持者からなるグリオールの学派はしばしば「フランス民族学派」（Ecole d'ethnologie française）と称されるが，そこには西アフリカの少数の民族の研究に沈潜していったかれらの学的傾向に対する揶揄と批判が少なからず込められているのである。

フランスの人類学の発展に大きな寄与をなさなかったグリオール学派に対し，第二次世界大戦後のフランス人類学界をリードしたのは，一方において，モースの講義に接していたレヴィ＝ストロースであり，他方において，デュルケームのそれとは異質な社会学を実現していたジョルジュ・ギュルヴィッチ（Georges Gurvitch）の門下から出たジョルジュ・バランディエ（Georges Balandier）であった。このふたりは学風も影響範囲も異なるが，フランスに新しい，そして独自の人類学を作り出すのに貢献した。かれらはそれぞれ 1907 年と 1920 年に生まれているので，世代的には一昔前の研究者といえる。しかし，かれらの活動と影響力は直接に今日のフランス人類学のあり方につながっているので，歴史の項ではなく，フランス人類学の現状と課題を扱う第 5 節で論じるのが適切であろう。

2　フランスの高等教育システム

ここからはフランスにおける人類学教育について見ていく。しかしその前に，フランスの高等教育の制度的側面を押さえておきたい。フランスの高等教育は，世界でも他に類を見ないほどのエリート主義に特徴をもっている。この制度は，1794 年のナポレオンの時代につくられたものであり，その後いくつかの改革を経ながらも，基本的には大きな変化がないまま今日まで維持されている。これはフランス独自のものであるため，若干の説明が必要と思われる。

フランスの高等教育は，図 1 にあるように，大学とグラン・ゼコール（Grandes Ecoles）と呼ばれるエリート校の 2 本立てである。18 歳で高校を終えると，高校修了証明書であるバカロレアの試験を文理に分かれて受け，これに合格すれば，大学には入試がないのでどこの大学にでも進学することができる。私が留学した 1970 年代の終わりには，フランスにおける大学進学率は 10% 前後で，どの大学にも充分な余裕があった。ところが，1980 年代からフランスは経済的に失政がつづき，失業率，とりわけ若年層の失業率は 20% を越えている。そのため，若年者の多くは資格を取るために大学に進学するようになり，90 年代の末には大学進学率は 40% を超えるようになった[9]。わずか 20 年のあいだに大学生の数が 4 倍になったわけであり，各大学ではプレハブ校舎を建て増しするなどして対応を図ってきたが，とても学生数の増加に追いつくことはできなかった。そのため，学部の授業は 200 人，300 人の学生を対象としたマスプロ授業となっており，学生の理解力の低下が大きな問題になっている。

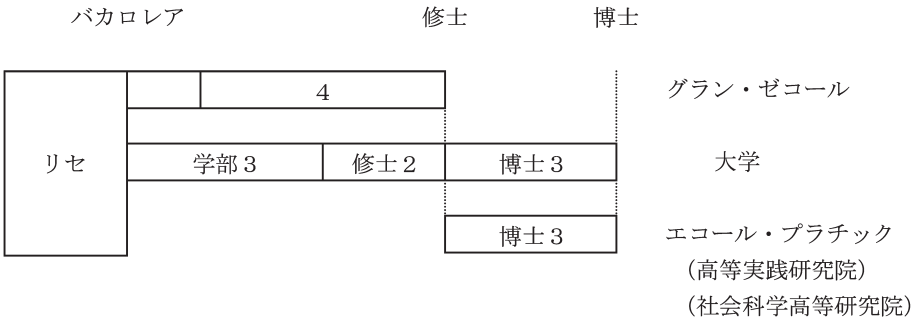

図 1　フランスの高等教育システム

一方，エリート校の方は，国立行政学校（l'Ecole Natinale d'Adminstration）や理工科学校（l'Ecole Polytechnique），高等師範学校（l'Ecole Normale Supérieure）[10]，などよく知られた学校であり，各施設で独自に入試を課している。これらのエリート校は入学がたいへん難しく，有名高校に付設されている準備学級で 1 年か 2 年の準備をしてから，入学試験に臨むのが一般的である。各学校とも一学年は 200 人前後と恵まれており，入学すると公務員の扱いとなり，給料が出るほか，卒業時には高級官僚や企業幹部，高校教員など，100% の就職の保証がある。しかも，入学時と卒業時には，それぞれの試験の順番が 1 番から最下位まで張り出されて，そのまま将来の出世につながっていくわけである[11]。

このグラン・ゼコールは在学年限が 4 年なので，卒業時のあつかいは修士修了になる（普通の大学では，学部が 3 年，修士が 2 年）。卒業生は，たとえば高等師範学校を出れば，そのまま高校の教師になり，授業をしながら勉強をつづけ，ある程度の年齢になったところで良い博士論文を書いて，大学の教員に迎えられるというのが過去の一般的なコースであった。しかし，1968 年の 5 月革命以降の一連の改革[12] と，ヨーロッパ連合（EU）の拡大にともなって他国の実情にあわせる必要が出てきたため，今日では大学の博士課程に進学して論文を提出することが求められるようになっている。そこで，グラン・ゼコールの出身者であっても，高校で教えながら博士課程に進学するというケースが一般的になっている[13]。

フランスの教育システムの特徴は，こうしたエリート主義の強さに加え，資格万能の社会だという点にある。たとえば銀行に就職したとしても，日本で言う一般職と総合職の差以上の差がそこにはある。日本のように女性が結婚で退職するということはないので，窓口の係りになれば一生窓口の係りである。市役所や県庁などでもおなじことであり，別の資格を取らないかぎり，昇進ということはまずない。そのため，向上心に富むフランス人は，いったん就職をしたあとも，資格を取って社会の階梯を上がることを心がけている。1 年の休暇をとって大学で勉強をする，あるいは就職しながら大学に通って博士論文を準備するというのが，フランスの大学の博士課程に多いパターンである。そのため学生の方も，回り道をしていない 23，4 歳の若い人から，30 代後半の社会人まで，多様な学生が存在することになる。

エリート主義と資格主義にならぶフランスの教育システムの特徴は，中央集権制にある。先のグラン・ゼコールがパリだけに存在していることが示すように[14]，フランスの場合にはパリと地方のあいだにかなりの格差が存在する。パリはその郊外をあわせれば 600 万の人口を擁するのに対し，フランス第 2 の都市圏であるリヨンやマルセ

イユの人口は，郊外を合わせても 100 万に達しない。フランスの大学はすべて国立なので，人口比率からいってもパリには 10 数校のパリ大学の分校が存在し（分校といっても日本でいえば独立した大学の感覚である），それぞれの分校の規模も大きい。そのほか，フランスの学界の最高峰であるコレージュ・ド・フランス[15] や，博士課程のみの高等実践研究院もパリだけにある。コレージュ・ド・フランスは学生を取らないが，1868 年に創設された高等実践研究院[16] は，理系の諸科学，文献学，宗教学，社会科学などの部門で博士課程の大学院生をとって，ゼミナール中心の教育をおこなっている。

パリには多くの研究教育施設が存在するだけでなく，ほとんどすべての主要な出版社はパリにあり，主要な展覧会・美術展もパリで開催されるなど，フランスにおける一極集中は日本の比ではない。そのため，教師の多くはパリを志向し，有名教授もパリに集中する傾向がある。それで，かなりの数の学生が，地方の大学の学部や修士課程を終えたあとで，パリの大学や高等教育機関で勉強をすることになる。全国の教育施設から集まり，学習水準も理解力も年齢も異なる学生たちにどのように教育をするか，ということがパリにある博士課程をもつ教育機関の大きな課題になっている。

3　フランスの大学院における人類学教育の特徴

フランスの大学院における人類学教育の特徴ということで，社会科学高等研究院をとり上げよう。ここは人類学部門だけで 40 人以上の研究者を擁する，フランスでも最大規模の研究施設であるだけでなく[17]，その学的水準においても疑いなくフランスで最高の水準にあるためである[18]。

まず研究科の名称であるが，社会人類学を称している。日本では文化人類学と言うことが多いが，これはアメリカ合衆国の影響が強いためで，イギリスでもフランスでも社会人類学と称している。なぜフランスで社会人類学というかについては，2 つの理由が考えられる。

1 つは，フランスでは「文化」ということばが一般的ではないことである。西川長夫が明快に論じたように，「文化」および「文明」のことばが最初に用いられたのは 18 世紀の啓蒙主義時代のフランスにおいてであり，伝統的で非合理的とされた旧来の社会に変えて，合理主義にもとづく近代的な社会の構築がめざされたときであった。イギリスとフランスは「文明」を旗印に近代化をおこなったのに対し，「文化」を採用したのは，英仏両国に遅れて近代化を推進したドイツであった。いまだ統一国

民国家が成立していなかったドイツにおいて，知識人は言語と慣習，記憶，哲学や文学を中心にドイツ民族の統一を図ったが，そこでのキーワードは精神的・特殊的・伝統的なものとしての「文化」であり，物質的・普遍主義的・革新的なものとしての「文明」に対抗して動員された概念であった（西川 2001）。

このような「文化」概念は，フランツ・ボアズを介して合衆国の人類学に持ち込まれ，のちに文化人類学と呼ばれることになる独自の学問を形成したが，フランスにおいては疎遠なままであった。フランスのニュアンスでいうと，極右の国民戦線が外国人移民とその子弟を「文化的他者」の名のもとに排除すべきことを主張していることに見られるように，「文化」には特殊的で排他的という感覚がある[19]（フィンケルクロート 1988）。中華主義的傾向をいまだにもっているフランスがめざすべき普遍的な善としての「文明」に対し，「文化」は伝統的・後進的・旧習的という感覚があるのであり，それがフランスで文化人類学の語を取り入れなかった理由のひとつだと思われる。たとえば，モースの死後 20 年経って出版された著作集は，全 3 巻で 2000 ページを超える大著であり，その編集の徹底と索引の充実には眼を見張るものがある。それを見ると，「文明」の項には多くの参照があるのに対し，「文化」についは項目そのものが存在しない（Mauss 1968–69）。「文化」という問題意識そのものがフランス人類学には存在しなかったのである。

第 2 の理由は，この学問が成立した歴史的コンテキストである。国内の先住民の研究として始まったアメリカ合衆国の人類学の場合，アメリカというひとつの社会のなかに，複数の集団がそれぞれ固有の文化をもって存在すると考えることは容易であった。これに対し，植民地社会の研究として始まったイギリスやフランスにおいては，研究対象となるのは個々の社会であり，それがどのように伝統的に統治されてきたか，それを有効に支配するにはいかなる社会制度とシステムを考案すべきかがつねに問題にされてきた（船曳 1988）。本国から切り離されていたがゆえに，完結した社会構造をもつとされた植民地「社会」の研究から出発した英仏両国の人類学と，合衆国というひとつの「社会」の内部に複数存在する「文化」集団の研究として開始された合衆国の人類学の違いが，こうした名称の違いに現れているのであろう。

それでは，社会科学高等研究院において社会人類学はどのように教育されているのか。先ほども述べたように，この教育機関は修士課程をもたない博士課程のみの教育研究機関なので，ここにやってくる学生は，年齢においても既習の知識のレベルにおいても相当の違いがある。そのため，一年目に関しては，人類学の基礎理論を詰め込むことに重点が置かれた教育が実施されている。私が留学していたときには，自分の

指導教官のゼミに出るほか，週に 4 コマの授業を受けることが必修であった。内容は，人類学の歴史が一年間あり，そのほかに宗教人類学，経済人類学，社会人類学がそれぞれ半年間，あとは言語人類学や芸術人類学，親族理論研究などの講義が四半期ずつあった。そのほかに，航空写真の見方や地図の描き方といった，フィールドですぐに役に立ちそうな実習の授業もあった。なかでも経済人類学の授業は，日本でも有名なモーリス・ゴドリエが教えていたぐらいなので，入門用の講義といっても，相当高いレベルのものであった。ともかく，この 1 年を終えたらすぐにフィールドに行って調査ができるように，基礎教育を叩き込んでおこうという教育方針である。

2 年目からは，この必修の講義はなくなるので，学生は自分のついている教員の授業に出るほかは，自由に他の講義に出ることができる。社会科学高等研究院は，1968 年の 5 月革命の影響がまだフランス社会に残っていた 1975 年に設立されただけあって，1979 年の時点ではずいぶん自由な雰囲気があった。それで，人類学だけでなく，他の分野の講義も自由に聴くことができた。社会科学高等研究院には 10 ほどのセクションがあるが，とりわけ有名なのは，ブルデューや社会運動論のアラン・トゥーレーヌのいた社会学と，ブローデルやル・ゴフらのアナール派歴史学，そしてゴドリエやマルク・オジェ，ルイ・デュモンらのいた人類学である。学生は結構，他の分野の講義に出て，そこから新しい問題関心を引き出したり，社会学の枠組みを人類学に使ったり，歴史学の枠組みを使ったりしようとしていた。そのようにして，学問の枠組みを比較的自由にズラしていくとことが推奨されていたような感覚がある[20)]。

こうしたことは，おそらくフランス的特徴といえるのではないか。フランスには理論志向，一般論志向の傾向があって，良かれ悪かれフランス的学風ということができる。人類学の博士課程の学生に対しては，きちんと調査に行ってモノグラフを書きなさい，ということがうるさいくらい指導される。実際，その方が就職に有利だということもある。ところが，かれらはいったん博士論文を書き終え，どこかにうまく就職できたとなると，一般的な研究をしたい，比較研究，理論研究をしたいという傾向が出てきがちである。たとえば日本で翻訳されているフランス人類学の本を見ても，レヴィ＝ストロース，モーリス・ゴドリエ（Maurice Godelier），マルク・オジェ，デュモン，ダン・スペルベル（Dan Sperber），クロード・メイヤスー（Claude Meillassoux）などであって，モノグラフと言えるようなものはほとんどない[21)]。これは，モノグラフを重視し，優れたモノグラフを量産してきたイギリス社会人類学との大きな相違点といえよう。

それでは，異質な傾向をもつフランス人類学とイギリス人類学のあいだがうまく

行っていないのかというと，むしろその反対である。英仏両国の人類学は実はすごく近くて，フランス人の夫人をもっていたフレイザーは，よくパリに来てモースの手料理をご馳走になっていたと言われるし，ラドクリフ＝ブラウンのオックスフォード大の教授選考のときには，モースが推薦状を書いている（このときモースは，エヴァンズ＝プリチャードの推薦状も書いている）。こういう裏話だけでなく，マリノフスキーは学生にフランス社会学の著書を読むように勧めていたし，エヴァンズ＝プリチャードもまたフランス社会学の論文を読むように学生に勧め，かれがオックスフォード大の教授になってからは，モースの「贈与論」やエルツの「右手の優越」，デュルケームとモースの「分類の原初形態」などをシリーズで翻訳させている（竹沢 2001: 4 章）[22]。

ただフランスでは，エヴァンズ＝プリチャードやリーチのような，詳細なデータの提示と理論的枠組みの形成が拮抗する緻密なモノグラフが出てくる可能性は低いのではないか。ある種の労働分割というか分業というか，英国人類学の実証主義的できわめて具体的なモノグラフの作成に対し，フランスの側は一般的な議論をする，理論研究をするというぐあいに，相補的関係がある。相補的関係の一例として，「分類」を強調したレヴィ＝ストロースの『野生の思考』（1962 年）が出たあとに，メアリ・ダクラス（Mary Douglas）の『汚穢と禁忌』（1966 年）が出て，エドモンド・リーチ（Edmond Leach）の「言語の人類学的側面」（1964 年）が出るということがあった。こういう意味で，フランスとイギリスのあいだの交流は，直接的な人間関係であれ，学的影響という間接的なかたちであれ，結構頻繁にある[23]。これに対し，フランスの側から見るとアメリカ人類学とは折り合いが悪い。フランスで翻訳があるのは，マーシャル・サーリンズとクリフォード・ギアツくらいで，他には思い浮かばない。それとは反対に，英国人類学の方は，マリノフスキーから始まり，ラドクリフ＝ブラウン，エヴェンズ＝プリチャード，リーチ，ジャック・グッディ（Jack Goody）と，主要な研究書の翻訳がつづいている。たがいに欠けるものを補い合う相補的関係という以上に，問題関心の共通性が両国の人類学の底流に存在するのであろう。

社会科学高等研究院にどのような教員がいて，どのような講義をしているかについては，最後のところに 2005 年の講義題目を載せてある。これを見ると，教授が 28 人いて，講師が 15 人である。また，かれらが教えている講義題目にしても，「制度の人類学」とか「都市と移動の人類学」とかはわかるが，「歴史と人類学」とか「親族人類学」とかである。これは大きな講義題目なので，毎年の講義はこの枠のなかで自由にやっているわけだが，それにしてもあまりにオーソドックスというか，時計の針を

20年くらい戻したような感覚の講義である。おそらくその理由は，1975年に社会科学高等研究院ができて，40名ほどの教員が就職した。それまで人類学を教育する中心的な施設というのはフランスには存在しなかったのに，新しい施設ができて一気に採用がなされた。ところがその後に研究機関が新設されず，地方の大学に小さな講座が設置されただけだったので，新陳代謝が少しも進まず，75年に採用された教員がそのまま残った。そのことが，フランス人類学にある種の停滞をもたらしているのは否定できないであろう。

これに対し，そのつぎに掲載しているアフリカ研究センターの講義題目は，一連の共通セミナーを実施するほかは，「西アフリカの移民とトランス・ローカリティ」とか，「ポストコロニアル理論研究」「黒人アメリカとカリブ海の比較研究」「移民とトランスナショナルな社会空間」「アフリカの芸術祭」など，斬新なテーマがならんでいる。アフリカ研究センターというのは，アフリカを専門に研究したいと思っている院生や若手の研究者を育成するための機関である。最初からこのセンターで共通講義を受けて，アフリカ研究者として自己規定していく場合もあれば，最初は人類学の一般講義を受講したあとで，その後はアフリカ研究，中南米研究，アジア研究などに分かれていくというケースもある。後者の場合には，1年目に広い講義題目をとり，2年目以降は自分の研究関心に近い，より専門的な講義をとっていくというシステムになるので，個別的なセンターの方がよりアクチュアルで，新しい話題についての講義も多くなる。こうした傾向はアフリカ研究センターだけでなく，中南米研究など他のセンターについてもそうである。

それでは，フィールドでの調査を終え，博士課程を終えたあとでどうなるか。博士論文を書いてすぐに大学や社会科学高等研究院に就職できるというケースはまず存在しない。フランスには原則として私立大学が存在しないので，大学の数はきわめて限られている。また，日本でいう教養学部が存在しないので，人類学の講座が設けられているのは，全国で10とか20とかのオーダーである。それで，とても評価の高い論文を書いた学生の場合（しかも，有力な教授の推薦状がついた場合），国立科学研究センターや開発研究院（IRD, Institut des Rechrches pour le Développement，日本でいえばJICA）に就職することになる。とはいっても，毎年募集があるのはせいぜい4，5人なので，社会科学研究院だけで博士課程の学生が年に100人程度いて，その半数が博士論文を書き終えるとすれば，リクルートされるのは10人にひとりの計算になる。しかも社会科学高等研究院だけでなく，博士課程をもつ全国の大学から応募があるわけだから，かなりきびしいのは間違いない。

ただフランスの場合，これは何人かの教員に聞いたことだが，市町村役所，県庁といったところに就職するケースがある。フランスには国内に外国人移民とその子弟が500 万人以上存在し，その半数以上がムスリムである（HCI 2000）。そういうことから，かれらをフランス社会にどう「統合」していくかということが，1980 年代以降きわめて大きな社会問題になっている。このとき，かれらの抱える問題をくみ上げ，それに対処していく窓口になるのが市町村である。フランスの人類学の教員に言わせると，社会学の出身者は外国人移民の窓口にはなれない。かれらはデータの処理能力はあるけれど，自分で調査をした経験がほとんどないので，窓口の役目をつとめることはできない。それに比べて，人類学をやった人間はフィールドワークをやっているので，そういう窓口の役目にはうってつけだとの定評があるそうである。博士論文をきちんと書きさえすれば，市町村や県庁に外国人や移民の第二世代の「統合」のための専門職員というかたちで採用されるケースがかなりあるので，就職にはそれほど困らないという話であった[24)]。

こうしたことも背景にあるのか，フランスの人類学は，現在「自分のところの人類学」（l'anthropologie chez soi）というのが流行である。従来フランス人類学の大きな柱であったアフリカ研究が，フランスのアフリカ離れということもあって，調査の資金が出にくくなっている。そうした理由もあって，若手の研究者の多くがフランス国内，あるいはヨーロッパ内部で調査をするという傾向がある。ヨーロッパといっても，過去にはヨーロッパの地方的な民俗の研究が主だったのが，企業の海外進出にともなう文化摩擦の研究や，移民の問題やかれらの作り出す新しい文化の研究，さらには民族的・宗教的な紛争や旧共産圏社会における社会と意識の変化など，新しい問題関心に沿った研究である。フランスの人類学の雑誌である『人類』誌を見ても，国内やヨーロッパ内の諸問題についての特集がしばしば組まれているし，『グラディーヴァ（*Gradhiva*）』はもともと人類学の歴史の雑誌なので，国内の議論が主である。このようにして，国外の調査を専門にしてきた年長の人類学者と，フランス国内およびヨーロッパ内で研究してきた若手研究者とのあいだのズレが，人類学者のあいだの対話を困難にしている理由のひとつだと近年言われるようになっている。

こうしたことは，大きく言えば，ヨーロッパ連合の建設と拡大により，フランス人およびヨーロッパ人の眼が外にではなく，内に向かっていることのひとつの現われと言うことができるだろう。長年にわたって植民地支配をおこない，その後もそれなりの投資をしてきたアフリカ諸国の抱える政治的・社会的・経済的困難は，フランスにおいてもイギリスにおいても，いわゆる「アフリカ離れ」を引き起こしている。アフ

リカは開発援助の対象であっても，それ以上のものではなくなりつつあるのである。これに対し，アジアの諸社会に対する関心，そしてとりわけヨーロッパに対する関心は増大する一方であり，こうしたことが人類学の新しい傾向を左右しつつある。とすれば，ここで問題になるのは，これまでヨーロッパ研究やフランス研究を独占してきた社会学その他の諸科学と，どのように相互乗り入れし，どのように差異化をはかっていくかであろう。その意味では，フランスにおいても，人類学の教育と研究が転機を迎えつつあるのは間違いないといえよう。

4　フランス人類学の現状と展望

最後にフランス人類学の現状とそれがどこに向かいつつあるかについて，かぎられた視点からではあるが述べておきたい。

第二次世界大戦後のフランス人類学をリードしてきたのが，レヴィ＝ストロースとジョルジュ・バランディエ（Georges Balandier）のふたりであったことは衆目の一致するところであろう。パリ大学の法学部と文学部を卒業後，ブラジルで社会学を講義したレヴィ＝ストロースは，アマゾンで現地調査に従事したのちにフランスに帰国する。やがて第二次世界大戦が勃発して，フランスがナチス・ドイツに屈すると，ユダヤ人であったかれはニューヨークへ亡命することを余儀なくされる。しかしこのことは，かれの研究にとっても，その後の人類学史にとっても，大きな幸いであった。20世紀のはじめにフェルディナン・ド・ソシュールが生み出した構造言語学は，伝統を重んじる西欧諸国では省みられることなく，東欧の国々でのみ講じられ，発展されていた。構造言語学やその影響を受けた音韻論の発展を実現したプラハ学派のリーダーであったローマン・ヤーコブソン（Roman Jakobson）と，レヴィ＝ストロースはニューヨークで出会ったのである。ヤーコブソンの『音と意味についての6章』（1976年）は，かれが1942–43年にニューヨーク大学でおこなっていた講義の雰囲気を伝えるものとして，興味深いものがある。このフランス語版にはレヴィ＝ストロースが序文を書いており，かれにとってヤーコブソンの講義の影響がいかに大きいかを，余すところなく述べている（ニューヨーク時代のレヴィ＝ストロースについては，レヴィ＝ストロースの『遠近の回想』（1991年）を参照）。

構造主義的方法を身につけたレヴィ＝ストロースは，1949年に『親族の基本構造』を出版して，学界での地位をゆるぎないものにする。かれの構造主義的方法は，1945年に書かれた論文「言語学と人類学における構造分析」（のちに『構造人類学』所収）

に要約されているが，その要点は 4 つあった。1. 意識的な現象の研究から，その無意識的な下部構造の研究に向かうこと，2. 項を独立した単位とするのではなく，項と項の関係を重視すること，3. 体系の概念の導入が必要であること，4. 演繹を通じての一般法則の発見を心がけること（レヴィ＝ストロース 1972: 39）。これらの原則がもっとも見事に展開されたのが『親族の基本構造』であり，それ以降，人類学においても隣接諸科学においても，いわゆる構造論革命が実現されたのである。

もっとも，レヴィ＝ストロースの方法はあまりに周到かつ複雑すぎて，人類学には役に立たないと思われるかもしれない。しかしかれによれば，言語学は社会科学のなかで「科学の名を主張することのできる唯一の科学」なのであり（レヴィ＝ストロース 1972: 37），その方法の厳密さを導入することは，人類学が科学になるためには必要なことなのである。実際，レヴィ＝ストロースの構造主義的方法が，ミシェル・フーコー（Michel Foucault），ジャック・ラカン（Jacques Lacan），ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）といった他の分野の研究者にも決定的な影響を与えたことを見ても，かれの学的厳密さが 20 世紀後半の社会科学の発展にとって決定的な意味をもっていたことは明らかである。それまでの社会科学が，人間，主体，意味，構造，歴史などの基本用語を，キリスト教的―ギリシャ哲学的含意を引きずりながら無造作に用いていたのに対し，かれは煩瑣とも思える手続きを周到に踏むことによって，それらの用語に含まれるイデオロギー的要素を排除して，科学的使用に耐えられるものにしようとした[25]。近年の人類学では，主体や人間に代えてエージェンシーなどの語を用いようとする傾向があるが（バトラー 1999; 2004），それもこのレヴィ＝ストロースによって着手された道をさらに一歩先へ進もうとする試みといえよう。

一方，バランディエは，デュルケーム学派とは異なる学風をもつ社会学者ジョルジュ・ギュルヴィッツ（Georges Gurvitch）と近く，独立前後のアフリカに生じている変化を身をもってたどることに関心をもっていた[26]。すでに人類学においては，ミシェル・レリスなどがエメ・セゼール（Aimé Césaire）やジャン＝ポール・サルトル（Jean Paul Sartre）などと交わることで，1950 年の段階で植民地主義と人類学との共犯関係を指摘していた（レリス 1971; 竹沢 2001）。西アフリカや中部アフリカのフランス領諸国で，アフリカ社会研究のための研究所設置等の作業にたずさわり，その過程で多くの現地の知識人と接触していたバランディエにとって，こうした人類学に対する批判的視点は自明のものであっただろう。かれにとって，歴史的コンテキストを捨象して人類学の仕事をすることは不可能であったし，またそのコンテキストに着目することによってこそ人類学の可能性が開かれると思われたのであった（バランディ

エ 1983）。このときかれの関心が向かったのは，独立に向かう政治的な運動や経済情勢の分析ではなく，むしろその底辺にある旧来の社会構造の解体と再編成であり，植民地状況と独立に向かう過程のなかで，混迷した多くの魂がメシア運動へと吸収されていく様であった。これらの課題に焦点を合わせることで，かれは『黒アフリカ社会の研究』（1955 年）や『両義的アフリカ』（1957 年）など，同時代のアフリカ諸社会を理解させるための著作をあいついで完成させたのである。

かれの研究方法の特徴は，レヴィ＝ストロースのような社会構造の静態的把握ではなく，その変化に焦点をあわせた動態的なものであり，これをかれはイギリスのマンチェスター学派から学んだことを明言している（バランディエ 1971）。この意味では，かれの方法論にはレヴィ＝ストロースほどの斬新さや徹底さはない。しかしその一方で，かれには「植民地状況」や「第三世界」など，その後広く用いられることになる用語を作り出す才能があった。かれはこれらの語を操作することで，同時進行中の事態を把握できる学問として人類学を再編成しようとした。そうしたかれのもとには，権力とイデオロギーの人類学を提唱するマルク・オジェ，経済人類学や奴隷制と交易の史的研究をおこなったクロード・メイヤスー，マルクス主義人類学を提唱したエマニュエル・テレイ（Emmanuel Terray）やジャン＝フィリップ・レイ（Jean-Philip Lay），ジェノサイドをいちはやく告発したロベール・ジュルダン（Robert Jourdan）など，他国にはあまりないタイプの若手研究者が集結した。かれらが中心となって，レヴィ＝ストロースのそれとは違うタイプの人類学をフランスに作り上げたのである[27)]。

アフリカのフランス植民地があいついで独立した 1960 年に，レヴィ＝ストロースは『人類（*L'Homme*）』という雑誌を作り，バランディは『アフリカ研究誌（*Cahiers d'études africaines*）』という雑誌を作った。それ以来，この 2 つの雑誌はフランスを代表する人類学の研究誌でありつづけている。また，レヴィ＝ストロースは 1959 年に，フランスの最高研究機関であるコレージュ・ド・フランスの教授になり，バランディエは 1961 年に高等師範学校の教授になるのと並行して，1966 年からは開発研究院の前身であるオルストム（ORSTOM）の人文科学部門の責任者になっている（のち，ソルボンヌの社会学の教授）。両者ともに社会科学高等研究院の教授を兼任することで博士課程の学生の育成に当たったが，これらの事実が示すように，レヴィ＝ストロースとバランディエに由来する異なるタイプの人類学が 1960 年には確固たる地位を獲得していたため，それをどのように統合し，乗り越えていくかということが，1970 年代，1980 年代に活躍するフランスの人類学者の課題となっていった[28)]。

1978 年にはエドモンド・サイードの『オリエンタリズム』が合衆国で出版され，1986 年にはジェームズ・クリフォードらが編集した『文化を書く』が話題になるなど，アメリカ合衆国の人類学は 1980 年代に大きな変化を経験している。そうした流れに対して，フランス人類学は今日にいたるまで無縁なままに来ている。おそらくその理由は，イギリスやフランスなどの過去の植民地大国では，植民地時代の功罪についての評価がいまだ充分には総括されていないこと[29]，そしてサイードはフーコーの影響を公言し，クリフォードも元来はフランス人類学史の研究から出発したために，フランスの側から見れば自分たちが本家であるとの意識があるためであろう[30]。カルチュラルスタディーズにしてもおなじような見方をしており，何人かの研究者は，あれはフーコーやアルチュセールから出てきたものだから，その問題意識はすでに十分フランスで議論されているのだと述べていた。

1980 年にはフランスでもブルデューの『実践感覚』が出版されて，レヴィ＝ストロースの方法に対する批判が明確に出てきた。後者のように行為当事者よりもその背後にある「構造」を重視することは，行為者がおこなうさまざまな実践や社会の再生産の問題を捨象することになるという批判である[31]。ただ，フランスの学界は狭い世界であり，全国学会が存在しないなど，全部が個人的なコネでつながっているような世界なので，表立った批判は出にくい構造になっている。1975 年に『人類』誌で，レヴィ＝ストロースの弟子筋に当たるモーリス・ゴドリエ（Maurice Godelier）と，バランディエから出てきたオジェ，そしてレヴィ＝ストロースの 3 人が対談をおこなって，その当時のフランス人類学の状況について総括をやっている。そこにおいても，レヴィ＝ストロースの方法の可能性や限界を徹底して議論するというのではなく，それをいったん受け入れたあとで，どのようにして乗りこえていくかという方向で議論がなされている（レヴィ＝ストロース他 1985）。フランス的な中央集権制ないしキャパシティの狭量さが，学的発展の限界になっているのは疑いない。

レヴィ＝ストロースは 82 年にコレージュ・ド・フランスの教授を辞めて，アフリカ研究者で親族研究に新しい境地を開いたフランソワーズ・エリチエが教授になり，つい最近フィリップ・デコラ（Philippe Descola）という中南米研究の生態人類学者が教授になった。その意味では，レヴィ＝ストロースの影響力や問題意識がそのまま受けつがれていっているような感覚がある。バランディエもその少し後で退官したが，アフリカ研究を中心にしたこちらのグループも，フランスのアフリカ離れがあるせいか，もうひとつ元気があるようには見えない。権力とイデオロギーの人類学を主張していたオジェが 1980 年以降，現代世界の一般的な分析に向かい（オジェ 2002），「マ

ルクス主義人類学」（1969 年）を提唱していたテレイが，フランス国内の滞在許可証をもたないいわゆる「非正規滞在者」の支援のために 1 ヶ月のハンガーストライキを実行するなど，旧アフリカ研究者たちもフランスあるいはヨーロッパの問題に向かう傾向がある。

研究対象の移動はもちろん悪いことではないし，それを通じて新たな問題意識の発掘や分析概念のつくり変えが可能になるばあいもあるであろう。実際，フランス国内にかぎっても，人口の 10 分の 1 近くに達するムスリムの問題はあまり手掛けられていないし，移民の問題，地域主義の問題，グローバリズム過程のなかの文化摩擦の問題，移民の第 2 世代が生み出しているさまざまな文化的実践など，文化をめぐる多くの課題が人類学者によっては手がけられないまま山積している[32)]。バランディエが切り開いた，同時代社会の分析，同時代の社会が抱えているさまざまな文化的・社会的問題の解決をめざすような研究は，人類学にとってつねに求められているものであるはずである。

ただここで気をつけなくてはならないのは，同時代の社会が抱えている問題の解決にだけ向かうのであれば，人類学は社会学や政治学と変わらなくなる，あるいは悪く言えば，その下位学問として位置づけられる危険があるということである。レヴィ＝ストロースやエヴァンス・プリチャードの研究に代表されるように，人類学の可能性のひとつは，西洋近代が作りあげてきた観念体系や学問の枠組みを，現地調査から出発したり，徹底した方法論的懐疑を通じて，批判的にとらえ返す点にあった。従来はそれを非西洋社会の研究から出発することでおこなってきたのだが，それらの社会や文化もまたグローバル化のなかで大きな変化を経験している以上，単純にそれに依拠することはできないであろう。一層の概念的枠組みの洗練と，問題意識の明確化，そしておそらくは新たなフィールドワークの対象と方法の案出が，求められているのである。

この点において，研究方法や概念の明確化に向かうレヴィ＝ストロースと，同時代社会の人類学を提唱するバランディエという，ふたつの相異なる人類学が共存してきたフランス人類学には可能性があった。実際，ふたりの問題意識や方法を架橋しようとしたゴドリエやオジェの研究には，誠実な問題構築とそれに由来するある種の可能性が認められた（ゴドリエ 1986; オジェ 1995）。しかしながら，もし現在そうであるように，若い世代と古い世代，国外で調査をおこなった研究者と国内・ヨーロッパ内の研究者のあいだのコミュニケーションが困難になり，文化をめぐる諸問題に背を向けて，研究者が狭い領域にタコツボ化している現状がつづくなら，フランス人類学か

ら大きな革新が生まれてくる可能性はないのではないか。それが私のフランス人類学の現在の診断であり，いつわらざる感想である。

結論

フランス人類学の現状に対する私の診断は，暗いものになってしまった。ただフランスの人類学・社会学の歴史を振り返ると，たいていの研究者は日本の研究者とほとんど変わらないレベルであり，大きな違いがあるわけではない。ところがフランスでは（これは九州大学の関一敏氏の持論である），何十年かに一度，デュルケームやモース，レヴィ＝ストロース，ブルデューといったすごい研究者が出てきて，猛烈に論文や著書を書き，根本的な変革を実現するということがある。その意味では，今後大きな変革が生まれてくる可能性がないとはいえまい。フランスの教育システムそのものが，そうした桁外れのエリートを待ち望むようにつくられているのだからである。

人類学があまりに安直に「他者」の文化と社会の研究ができると信じていた時代は，遠い過去に終わっている。その一方で，フィールドワークから出発し，「かれら」の視点を重視していく方法は，それが新たな問題意識や批判精神を生み出すことができたなら，評価されなくなることはないだろう。その意味では，フランス人類学のフランス回帰，ヨーロッパ回帰は，人類学の新たな胎動を告げているのかもしれない。これまで人類学が無条件に依拠してきた理論的な枠組みや方法を，もう一度問い直すことからしか，再出発は可能ではないのではないか。具体的な問題から出発しつつ，研究方法と概念を問い直していくことにしか，可能性はないのではないか。

付録　社会科学高等研究院の講義題目一覧

社会人類学の講義題目（2005 年度，28 教授，15 講師）

「制度の人類学」（Marc Abélès 教授）「都市と移動の人類学」（Michel Agier 教授）「世界の秩序と無秩序」（Michel Agier, Didier Fassin, Jonathan Friedman 教授）「歴史と人類学」（Jean-Loup Amselle 教授）「親族人類学」（Laurent Barry 講師）「行為の人類学と人類学の認識」（Alban Bensa 教授）「口頭伝承の人類学」（Nicole Bèlmont 教授）「乳幼児の人類学」（Doris Bonnet 教授）「部分と全体：社会関係」（Stéphane Breton 講師）「言語実践の人類学」（Cécile Canut 講師）「映像人類学」（Jean-Paul Colleyn 教授）「東南アジアの民族学と社会学」（Georges Condominas 教授）「芸術とものの人類学」（Brigitte

Derlon 講師）「地域環境の人類学」（Philippe Descola 教授）「言語相対主義の問題」（Emmanuel Désveaux, Michel de Fornel 教授）「北アメリカ先住民の人類学」（Emmanuel Désveaux 教授）「人類学の実践と理論」（Jean-Pierre Dozon 教授）「中米の社会と文化人類学」（Christian Duverger 教授）「文化の制度：芸術の裏面」（Daniel Fabre 教授）「倫理の理法と政治行動」（Didier Fassin 教授）「アフリカ研究入門」（Eloi Ficquet, Jean-Claude Penrad 講師）「世界システムの人類学」（Jonathan Friedman 教授）「インドの社会人類学」（Jean-Claude Galey 教授）「アメリカ研究入門」（Juan Carlos Garavaglia 教授）「ブラジルの政治人類学」（Afranio Garcia 講師）「ネットワークの人類学」（Barbara Glowczewski, CNRS 上級講師）「権力の諸形態」（Maurice Godelier 教授）「政治空間の人類学」（Jean-François Gossiaux 教授）「東南アジア大陸部の比較人類学」（Yves Goudineau, EFEO 上級講師）「朝鮮の社会文化人類学」（Alexandre Guillemoz 教授）「南ヨーロッパの社会人類学：売春の制度」（Elisabeth Handman 講師）「フィクションと映像の人類学」（Jean Jamin, Jean-Paul Colleyn 教授）「ジャズの人類学」（Jean Jamin 教授）「社会的規則と法的規範」（Alain Mahé 講師）「インド洋における移民」（Jean-Claude Penrad 講師）「他者の皮膚のなかの規範外の領域」（Mary Picone 講師）「個人，時間，親族」（Enric Porqueres I Gene 講師）「アラブの人類学：関係，表象，対立」（François Pouillon 教授）「アンデス社会の人類学」（Gilles Rivière 講師）「記憶術の人類学」（Carlo Severi 教授）「イコンの伝統と社会的記憶」（Carlo Severi 教授，Giovanni Careri 講師）「西洋的知識の人類学」（Wiktor Stoczkowski 講師）「現代的技術の人類学」（Michel Tibon-Cornillot 講師）「ベルベル文化の人類学」（Tassadit Yacine 講師）「インド世界の歴史と科学の人類学」（Francis Zimmermann 教授）

アフリカ研究センター講義題目（2005 年度）

「アフリカ研究センター共通セミナー」（Michel Agier 教授他）「乳幼児の比較研究」（Doris Bonnet, IRD 主任研究員）「第三空間：西アフリカの移民とトランス・ローカリティ」（Jean Schmitz, IRD 主任研究員）「南部アフリカの社会問題と国家と社会」（Jean Copans パリ第 5 大学教授）「サハラ以南アフリカの文学」（Jean-pierre Dozon 教授）「ポストコロニアル理論研究」（Maria-Benedita Basto, Viana de Castelo 大学助教授）「黒人アメリカとカリブ海の比較研究」（Marie-Jose Jolivet, IRD 主任研究員 , Anna-Marie Losonczy 高等実践研究院講師）「移民とトランスナショナルな社会空間」（Mahamet Timera，ルアーブル大学講師）「アフリカの芸術祭」（Eloi Ficquet 講師）

注

1）　Takezawa Shoichiro, 1985, *Symbole et pouvoir; le système général des rites, le cas des Dogon du Mali*, EHESS. それを若干短くしたものが，竹沢 1987 として出版されている。

2）　このくだりは，すでに他所でくわしく論じている。フランスにおける人類学・民族学の成立とその歴史的コンテキストについては竹沢 2001，形質人類学の成立とその人種主義的傾向については，竹沢 2005 参照。

3）　パリ以外の人類学協会の設立年代は以下の通りである。ワシントン人類学協会（1859 年），ロンドン人類学協会（1863 年），マドリッド人類学協会（1865 年），ドイツ人類学雑誌（1865 年，1870 年にドイツ人類学・民族学・先史学協会），モスクワ自然史協会人類学部門（1866 年）。この点に関しては，竹沢 2005 参照。

4）　各国の主要な民族学・人類学博物館の設立時期を記述する。ライデン民族学博物館（1837 年），ベルリン古代博物館（1856 年，1868 年よりベルリン民族学博物館），ポルトガル植民地博物館（1870 年），ライプチヒ民族誌博物館（1873 年），ローマ先史学・民族誌学博物館（1874 年），ドレスデン人類学民族学博物館（1874 年），オックスフォード大学ピット・リヴァース博物館（1883 年）。アメリカ合衆国では，ピーボディ考古学民族学博物館（1866 年），スミソニアン博物館の民族学局（1879 年），アメリカ自然史博物館人類学部門（1895 年）。19 世紀末までに，西洋の主要な国々は民族学・人類学博物館をもつようになったのであり，これがこの学の制度化に大きく貢献したのであった（Stocking Jr. 1985; Gaillard 2002）。

5）　機能の考え方自体，デュルケームが生み出したものであった。かれは 1895 年の『社会学的方法の規準』で，社会を有機体のアナロジーでとらえ，有機体の構成要素間の関係概念としての機能概念を明確に打ち出している（デュルケーム 1978: 196–199）。

6）　モースは，人類学史にその名を残した研究者であるが，生前かれのみの名前で著書を出版したことがなかった。その一方でかれは，英独蘭語，北欧諸語，古代イラン語，サンスクリットなど，30 もの言語をあやつることができたとされるほどの博学であった。と同時にかれは，ボクシングのアマチュア・チャンピオンを自認し，スキーやダンスに秀で，夫人がフランス人であったフレイザーに料理をふるまうほどの腕前であった（Fournier 1994; 竹沢 2001）。さらにかれは熱心な社会党員であり，その機関紙『ユマニテ』の協同組合の欄の編集責任者を長くつとめ，みずから小さな協同組合に出資するなど，理論と実践の両面において献身的に社会主義の普及と支持につとめていた。『社会学年報』が廃刊になった 1913 年から「贈与論」を出版する 1925 年までのあいだ，かれは第一次世界大戦に動員されていたこともあって人類学の論文を数本しか書いていないが，社会党の機関紙やその系列の雑誌には 100 本以上の論文を発表していたのである（Fournier 1997）。

7）　モースのこの研究所での講義については，いくつもの逸話がある。かれの講義録をのちに出版したドニーズ・ポームは，「モースはひとつの観念から別の観念へとジャンプし，ショートすることを好んだ。かれはすべてを知っていた」と述べている（竹沢 2001: 220）。ルロワ・グーランもまた，モースの講義に驚嘆しながらついていったひとりであった。「モースは天才的な混乱の人でした。かれはほとんどなんでも混ぜ合わせて，そこから忘れられないものを取り出したのです。かれはマルセル・グリオールからフランカステルにいたる一世代を教育しました。…私はかれの講義を 3 年間聴いて，可能なかぎりノートをとりましたが，かれがときおり示す話の糸がどこへつながっていくのか，見つけることはできませんでした。全面的にかれの講義を聴いていた 2 年のあいだ，私は友人のひとりと役割を変えてノートをとり，それを突き合わることで，かれの講義の本当の内容を確立しようとしました。しかし私たちは一度もそれを首尾一貫したものにすることができませんでした。それはあまりに豊かで，いつも地平のかなたに消えていたのですから。のちにかれの講義は弟子の集団によって出版されましたが，それは私たちのとはまったく違っていたのです（Leroi-Gourhan 1982: 33; 竹沢 2001: 220）。

8）　マリノフスキーに対するフランス社会学の貢献については，これまで正しく評価されなかった傾向がある。しかしながら，かれの『西太平洋の遠洋航海者』の「序文」のつぎのくだりは，デュルケーム的としかいいようのない発言である。「われわれは社会学者として，A または B の個人としての感情や，かれら自身の個人的な経験の遇有性などには関心がない。ただ一つの関心事は，かれらが任意の社会の成員として，どのように感じ，考えるかということである。この点では，かれらの心理状態は刻印を押されており，生活を規制する諸

制度，伝統や伝承，思想の媒体である言語などによって，ステレオタイプ化されているのである。かれらがそのなかを動いている社会的・文化的環境が，かれらに一定の様式で感じ，考えることを強いるのである」（マリノフスキー 1967: 91）。

9）　朝日新聞の記事によれば，学歴による若年層男子の失業率は，中卒以下で 44.4%，職業適性証（職業高校修了）で 23.7%，バカロレアで 15.1%，大卒以上で 11.5% と，学歴に応じてかなりの違いがある（朝日新聞 2006/4/6）。フランスの大学の授業料は無料なので，失業を逃れるためにも，大学進学率はうなぎ上りに上がっているのである。

10）　そのほかに，政治学院（les Sciences Po.）がある。その知名度と入試の難しさは知られているが，政治学院がグラン・ゼコールのひとつであるか否かは不明である。

11）　試験がどれほどきびしいものかを示すものに，デュルケームの逸話がある。アルザスに隣接するヴォージュ県の出身であったかれは，高等師範学校への入学試験では 1 番で合格したが，学内のスノビズムに嫌気がさしたためにあまり勉強をせず，卒業時の高校教員資格試験であるアグレガシオンではビリになっていたという。他に著名な人類学者でいえば，マルセル・モースは，高等師範学校ではなく，おじのデュルケームが教鞭をとっていたボルドー大学を出てアグレガシオンを受け，全国で 3 位。20 歳代で珠玉の「右手の優越」を書いたあと，第一次世界大戦で戦死したロバート・エルツは 1 位でこの試験を通過したといわれている（Fourneir 1994; 竹沢 2001）。

12）　この改革の目玉のひとつは，中学から（今では小学 4 年から）英語の授業をおこなうようになったことであった。それまでのフランスの教育は古典語が中心で，ラテン語の学習が義務づけられていた。そのため，今の 50 台以上の人間のばあいには英語が下手なのに対し，その下の世代になるととても流暢に英語をあやつるようになっている。

13）　2000 年前後の改革で，グラン・ゼコールにも博士課程が設けられるようになっている。しかし，学生の多くがそれに進学しているかどうかは不明である。

14）　1982 年以降のミッテラン政権時に実現された地方分権により，全国に 10 ある大学管区にもグラン・ゼコールを建設する動きがある。しかし，それらの地方の学校とパリの学校のあいだの社会的評価の違いは厳然として存在しており，卒業後のキャリアなどでは大きな隔たりがある。

15）　コレージュ・ド・フランスは，知識の発展のために 1530 年に設立されて，今日まで存続する施設である。そこでは伝統を重んじて学生を取らず，すべての講義は自由聴講制でおこなわれている。各分野の第一人者が教授に選任されるケースが多く，近年ではレヴィ＝ストロース，社会学のブルデュー，哲学のフーコー，歴史学のル・ゴフ，記号学のロラン・バルトなどがその教授であった。なお，学生を育成したいと考える教授の場合には，のちに見る社会科学高等研究院などの教授を兼任することで，そこで大学院生を取ることができる。

16）　高等実践研究院は，大学での講義が自由聴講制を原則としていた 19 世紀の半ばに，実験とゼミナール形式の実践的な教育を実施するために設置されたものである。最初は理系の 3 つのセクションと文献学からなっていたが，1886 年に宗教学が第 5 セクションとして加えられ，のちに社会科学の第 6 セクションが加えられた。後者は「アナール派」のフェルナン・ド・ブローデルのイニシアチブのもとで，1975 年に社会科学高等研究院として独立して今日にいたっている。独立してというのは，博士論文の審査の資格を独自にもつということである。

17）　フランスには国立科学研究センター（Centre National de la Recherche Scientifique, CNRS）という，規模の大きな研究機関がある。ただこれは，日本でいうと，研究機関というより日本学術振興会に近い組織であり，研究資金はすべてこれを通じて支給されるほか，CNRS に所属する研究員はどこかの大学に設置されている研究施設で研究をおこなうのが一般的である。たとえば大学に行くと，その大学の教授や助教授のほかに，CNRS の研究員（指導研究員 Directeur de recherche（教授に相当），主任研究員 Maître de recherche，研究員 Attaché de recherche の区別がある）がいて，研究に従事しているのが一般的である。かれらは教育の義務はないが，大学のなかに研究室を割り当てられて，そこで研究をおこなうわけである。ただ，フランスの場合，CNRS の研究員で大学の教員を兼任するケースがあるので，実態はより複雑である。

18）　最高の水準と言い切ることには，違和感があるかもしれない。しかし，そこで出版されている学術雑誌を見れば，その表現に誇張がないことがわかるだろう。人類学の『人類』誌（L’Homme）と『アフリカ研究誌』（Cahiers d’études africaines）をはじめ，社会史の『アナー

ル』（Les Annales），記号論・表象論の『コミュニカシオン』（Communication），社会学の『社会科学研究記録』（Actes de la recherche en sciences sociales）など，フランスを代表する学術雑誌はここから出版されているのである。

19）　国民戦線が文化人類学の文化相対主義を援用して，文化や生活慣習の違いをもつ移民とその子弟を国外に追放することを主張していることからも，フランスでは「文化」に対する否定的見方が一般的である。19 世紀を通じて人口停滞を経験したフランスは，5 人にひとりが両親ないし祖父母に外国人をもつといわれるほど外国人を受け入れてきた国であるが（Tribalat 1991: 71），憲法はフランスが「一にして不可分の共和国」であると明記しており，外国人移民とその子弟は，教育システムと就職を通じてフランス社会に「統合」されることが求められている。かれらは 500 万以上の人口を擁し，その半数以上がムスリムであるにもかかわらず，国勢調査の統計に現れてくることもなければ，マイノリティ・グループとして認められることもない。その一方で，かれらに対する人種差別は，学業，就職，住居，治安などさまざまな点において厳然として存在しており，これが 1980 年代以降，毎年のように生じているいわゆる「都市暴動」の原因となっている（竹沢 2006）。

20）　アメリカ合衆国の大学院教育と異なり，フランスの大学院では学生に本を読ませるということがあまりない。1970 年代に，中国派の一部が『テルケル』（*Tel Quel*）という雑誌を出していたが，この雑誌のフランスでの販売部数が，日本やアメリカの半分以下だったというのは有名な話である。一般にフランスの学生は多くの本を読まないが（図書館ではたくさんの学生が詰め掛けているので，より正確には本を購入しないが），私が留学していた 80 年代の初め，ブルデューの『実践感覚』が出版されたときに，多くの人類学の学生がそれを購入して読んでいたのに驚いた記憶がある。ブルデューのフランス語は悪文で有名で，しかも 500 ページを越す大著であったが，人類学の学生の多くがそれを読んでいたのである。フランスの学生は，教師に指定されると本を読まないが，なにも指定されなければ積極的に読むのだと感心したものだ。

21）　わずかにモノグラフと言えるのは，ジョルジュ・コンドミナスの『森を食べる人々』くらいであろう。もっとも，この点においては，ベトナム・インドシナ研究はピエール・グールー（Pierre Gourou）らの地理学のグループがすでに何冊もの大著をものしていたので，人類学者はそれとの差異化をはかるためにも，焦点の明確なモノグラフを書くことが求められていたという背景があった。

22）　エヴァンズ・プリチャード自身，フランス社会学への共感をつぎのように明言している。「私はいかなるトーテミズムのフィールドワークも，デュルケームの分析を超えていないことを確信しているし，未開の思惟に関するフィールドワークにかんしても，混乱した扱いにもかかわらず，レヴィ＝ブリュルの後期の著作における深さと洞察を超えるものはないとさえいいたいのだ。実際，誰も否定しないだろうが，今日の人類学が依拠している理論的資本のほとんどは，その探求が全面的に文献にもとづいていた人びとの書物にある。‥この資本が使い尽くされたなら，私たちはインスピレーションもないままにデータを集めるべく，ひとつのフィールドワークから別なフィールドワークへと移るだけの単なる経験主義におちいる危険がある。もしも個人的な意見を述べることが許されるなら，そしてもし選択し，知的忠誠を宣言することが必要であるなら，重大な留保をつけてではあるが，社会学年報学派の一員として自分を位置づけたい（Evans-Pritchard 1981: 182–3）。」

23）　私の指導教官であったマルク・オジェ氏は，ジャック・グッディのことを称して，「あいつはダチだ」（Il est mon copain.）という言い方をしていた。実際，かれのゼミには，グッディのほかにメアリ・ダグラスなども来て，講義をしていた。

24）　本屋に行っても，人類学関係の書物は片隅に追いやられ，しかもかなり以前に出た本が主であるのに対し，移民や文化的摩擦に関する本は，毎年何十冊と出版されている。これらの本は，社会学や政治学のコーナーの一部か，あるいはその近くの棚におかれるのが普通であり，問題関心を共有できるにもかかわらず，人類学とは一般に距離があるのが実情である。

25）　人文社会科学の課題は，まさにこの点にあると思われる。自然科学が人間の外部にある（と思われている）自然を対象とし，そこに未知の法則を発見しようと努めるのに対し，人文社会科学が対象としているのは，歴史的に形成され，社会的に拘束された一連の概念である。そのため人文社会科学の基本的課題は，社会的・歴史的に拘束された諸概念から，イデオロギー的ないし先入見的要素をとり除くことで，社会とそこでの人間の営みについての新しい理解をもたらすことである。この点については，アルチュセール（1968）が明快に論じ

ている。

26）バランディエについては，嶋田義仁のすぐれた紹介がある（嶋田 1988）。

27）多くの研究者を育成したバランディエと異なり，天才肌のレヴィ＝ストロースのもとからは若手の研究者は育たなかった。『マルクス主義と構造主義』（1962 年）を書いたリュシアン・セバーグ（Lucian Sébarg）や，『国家に抗する社会』（1974 年）を書いたピエール・クラストル（Pierre Clastres）は，レヴィ＝ストロースとおなじ南米社会の研究者であり，一時はいずれもその後継者とみなされたこともあったが，両者ともみずからの生命を絶つことを選択した。結局，レヴィ＝ストロースのあとをついで 1982 年にコレージュ・ド・フランスの教授になったのは，バランディエのもとから出，親族理論に新しい見解をもたらしたアフリカ研究者のフランソワーズ・エリチエであった。

28）それを乗り越えるための試みのうち，代表的なものに，オジェ（1995）がある。

29）それを示すのに，2005 年 2 月に批准された，フランスの植民地支配の功績，とりわけ北アフリカにおけるそれを学校で教えることを義務づける法律がある。これには，社会党や共産党のほか，多くの歴史学者や社会科学者から批判が寄せられたが，現政権はそれを押し切って成立させている（これはその後，街頭での反対行動の激化により撤回された）。こうした事実を見ても，過去の「栄光」を称えようというナショナリスティックな「大国」意識がフランス国民の多くにあることは紛れもない事実であり，フランスではいまだにポストコロニアル理論や過去の植民地主義を批判的にとらえ返す視点が優越することなく続いている。

30）人類学者のポジションを問題にするクリフォードらの問題意識は，フランス的意識からすればあまりに狭い倫理主義ということになる。フランス人はモラルを論じることが好きだが，そこで言うモラルとは，世界認識や生き方のモデルを含めたより包括的な知のあり方を示す語であり，研究者のポジションに還元されるものではない。

31）そこでブルデューは，つぎのように述べてレヴィ＝ストロースの方法を批判している。「学者は行為当事者を，晦冥なメカニズムによってかれらの知らない目的に向かってつき動かされる自動機械または惰性的物体の身分に還元している」（ブルデュー 1988: 163）。

32）2005 年 10–11 月のフランス郊外で起きたいわゆる「都市暴動」のあと，社会科学高等研究院でも一連の公開シンポジウムや公開講演が開催された。それには，フランソワ・デュベ（François Dubet）やドミニク・シュナッペール（Dominique Schnapper）といった移民問題を専門にやってきた社会学者に混じって，ディディエ・ファサン（Didier Fassin），エリキア・ンボコロ（Elikia M’Bokolo），ミシェル・アジエール（Michel Agier），テレイなどのアフリカニストも参加していた（ehess.fr. や ceaf.fr. 参照）。

文　　献

Balandier, Georges

1957　*Afrique ambïgue*. Paris: Union Générale d’Editions.

Evans-Pritchard, E. E.

1981　*A History of Anthropological Thought*, New York: Basic Books.

Fournier, Marcel

1994　*Marcel Mauss*. Paris: Fayard.

1997　*Mauss politique*. Paris: Fayard.

Gaillard, Gérald

2002　*Dictionnaire des ethnologues et des anthropologues*. Paris: Armand Colin.

Goody, Jack

1995　*The Expansive Moment: Anthropology in Britain and Africa*. Cambridge: Cambridge University Press.

Haut conseil à l’intégration

2000　*L’Islam dans la république*. Paris: La Documentation française.

Jakobson, Roman

1976　*Six leçons sur le son et le sens*. Paris: Les Editions de Minuit.

Leroi-Gourhan, André

1982　*Les Racines du monde*. Paris: Berford.
Mauss, Marcel
1968–69　*Œuvres*, 3 vol. Paris: Les Editions de Minuit.
Stocking Jr., Georges W.
1968　*Race, Culture, and Evolution*. New York: Free Press.
1985　*Objects and Others, Essays on Museums and Material Culture*, HOA, 3. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
Takezawa Shoichiro
1985　*Symbole et pouvoir, le système général des rites, le cas des Dogon du Mali*, thèse du 3ème cycle presentée et soutenue à l'EHESS. Paris: EHESS.
Terray, Emmanuel
1969　*Le Marxime devant les sociétés primitives*. Paris: Maspero.
Tribalat, Michèle
1991　*Cent ans d'immigration: Etrangers d'hier, français d'aujourd'hui*. Paris: PUF-INED.
Tylor, Edward B.
1929　*Primitive Culture*. London: John Murray.
アルチュセール，ルイ
1968　『蘇るマルクス』河野健二・田村淑訳，京都：人文書院。
オジェ，マルク
1995　『国家なき全体主義』竹沢尚一郎訳，東京：勁草書房。
2002　『同時代世界の人類学』森山工訳，東京：藤原書店。
クラストル，ピエール
1989　『国家に抗する社会』渡辺公三訳，東京：書肆風の薔薇。
グリオール，マルセル
1982　『水の神』坂井信三・竹沢尚一郎訳，東京：せりか書房。
ゴドリエ，モーリス
1986　『観念と物質：思考・経済・社会』山内昶訳，東京：法政大学出版局。
コンドミナス，ジョルジュ
1993　『森を食べる人々』橋本和也・青木寿江訳，東京：紀伊国屋書店。
嶋田義仁
1988　「バランディエ」綾部恒雄編著『文化人類学群像 2』pp. 217–236，京都：アカデミア出版会。
セバーグ，リュシアン
1971　『マルクス主義と構造主義』田村俶訳，東京：人文書院。
ダグラス，メアリ
1972　『汚穢と禁忌』塚本利明訳，東京：思潮社。
竹沢尚一郎
1987　『象徴と権力――儀礼の一般理論』東京：勁草書房。
1992　『宗教の技法――物語論的アプローチ』東京：勁草書房。
2001　『表象の植民地帝国』京都：世界思想社。
2003　「民族学博物館の現在――民族学博物館は 21 世紀に存在しうるか――」『国立民族学博物館研究報告』28 (2): 173–222。
2005　「人種／国民／帝国主義―― 19 世紀フランスにおける人種主義人類学の展開とその批判――」『国立民族学博物館研究報告』30 (1): 1–55。
2006　「国民統合の 2 つのタイプ――移民の統合／排除の視点から」『ユーラシアと日本』（印刷中）
近刊　「フランスにおける社会学の誕生」友枝敏雄編『社会学のアリーナ』東京：有信堂。
デュルケーム，エミール
1968　『自殺論』世界の名著 47，東京：中央公論社。
1971　『社会分業論』東京：青木書店。
1978　『社会学的方法の規準』東京：岩波書店。
西川長夫
2001　『増補　国境の越え方』東京：平凡社。

バトラー，ジュディス
1999 『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳，東京：青土社。
2004 『触発する言葉』竹村和子訳，東京：岩波書店。
バランディエ，ジョルジュ
1971 『政治人類学』中原喜一郎訳，東京：合同出版。
1983 『黒アフリカ社会の研究』井上兼行訳，東京：紀伊国屋書店。
フィンケルクロート，アラン
1988 『思考の敗北あるいは文化のパラドクス』西谷修訳，東京：河出書房新社。
船曳建夫
1988 「文化と社会」伊藤幹治・米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』pp. 17–46，京都：ミネルヴァ書房。
ブルデュー，ピエール
1988 『実践感覚』今村仁他訳，東京：みすず書房。
マリノフスキー，ウラジミロフ
1967 「西太平洋の遠洋航海者」寺田和夫・増田義郎訳，世界の名著 59，東京：中央公論社。
リーチ，エドモンド
1976 「言語の人類学的側面」『現代思想』4 (3): 68–90.
レヴィ＝ストロース，クロード
1972 『構造人類学』荒川幾男他訳，東京：みすず書房。
1976 『野生の思考』大橋保夫訳，東京：みすず書房。
1977 『親族の基本構造』上下，馬渕東一・田島節夫監訳，東京：番町書店。
1991 『遠近の回想』竹内信夫訳，東京：みすず書房。
レヴィ＝ストロース，クロード，モーリス・ゴドリエ，マルク・オジェ
1985 「人類学・歴史・イデオロギー」『現代思想』13 (4): 188–201。
レリス，ミシェル
1971 「植民地主義を前にした人類学」『獣道』後藤辰男訳，東京：思潮社。